かなるはだ觸りが私達にはたまらぬ程懐かしい。手輕なる油繪具は表現慾強き複雜なる近代の心理に適應して、水繪具のテンペラはイタリーにも千五百年代には押しのけられ、歐州繪畫は一般に光澤光りするてらてらした油畫の畫面になつて了つた。水繪具のにじみ沈んだはだとさびとを今もなほ愛する日本人こそ、歐洲にすたれたテンペラとそれの兄弟である壁畫（フレスコ）の技巧傳統を、あるひは少くともその氣分を正當に感受し得るものではなからうか。私は高蒔繪のやうなボチチエリの「春」（プリマベラ）の繪の花のかき方を見ながら、さう思つた。またピエロ、デラ、フランチエスカの繪を見ながら、これこそ古土佐の卷物の趣味上の貴族の味を大きく行つたものだと思つた。私は日本の畫かきがパリーへ行つて、印象派（象）以後の色の多い油繪を習つて歸るばかりでなく、少しは靜かなイタリーの山の町にでもこもつて、テンペラの純ぼく沈重なる味に打ち込む者があつていいと思ふ。厚板の上に丹念なる下塗りをして、そして金ぱくを張り、あるひは盛上げをして、そして筆をつゝしみ愛して、せんさいにかく、かけば色は下塗りの白壼（チエン）に沈み込んで、しつとりと薄霞むかのやうな遠い氣持の出るテンペラ畫の古法が日本にまるで傳はつてないが故に、畫家はひたむきに油畫に赴くとも考へられるのである。

③ 長谷川路可の留学

長谷川路可（本名龍三）は大正十年三月本校日本画科卒業後直ちにヨーロッパへ私費留学。主にフレスコを学び、ベルリン中央アジア探険隊採集壁画の模写に従事した。留学に際し、本校は「仏蘭西国及英吉利国滞在中東洋古画ノ調査ヲ嘱託」した（「大正十年職員関係書類庶務」）。

④ 戸部隆吉死去

大正十年三月二十五日、東洋美術史授業担当助教授戸部隆吉（号隆古）が死去した。仏教美術史研究に没頭し、業半ばであったため、夭折を惜しむ声が高かった。月報第二十巻第一号に追悼記事と肖像写真が掲げられており、略歴も紹介されているが、彼は洋画家になるつもりで上京して和田英作のもとに寄寓し、また、白井雨山宅にも出入りしたりして明治三十九年四月本校日本画科に入学、四十四年三月卒業した。在校中は結城素明宅へ塾生同様に足繁く通い、素明を介して柴崎恒信、平子鐸嶺らと知り合い、また、素明の友人加藤咄堂が主幹をつとめる『新修養』や高島米峰らの同人雑誌『新仏教』の挿絵を描いた。本学芸術資料館には卒業制作「枇杷と蕗の薹」（本書第二巻口絵参照）が収蔵されており、画才も豊かであったことが想像される。卒業後暫くの間、平福百穂の下宿に寄宿し、のちに百穂の紹介で『秋田魁新聞』その他に挿絵を寄稿した。明治四十四年七月青森県立弘前中学校教諭となり、次いで大正二年九月より同五年一月まで三重県立第三中学校教諭をつとめた後、東

戸部隆吉

京市富士前尋常小学校代用教員、訓導となった。折りしも大村西崖は東洋美術史研究の後継者を、鈴川信一は美術学校火災で焼失した学籍簿の整理をする手伝いを必要としていたので、両者相談の上、戸部を起用することになり、同六年十二月十七日に彼は東京美術学校雇（美術史研究室助手兼教務掛）に任命された。これより西崖の指導のもとに東洋美術史研究に没頭することになり、同八年九月から東洋彫刻史授業分担を命ぜられ、同年十二月には助教授に昇格、翌九年一月より東京女子高等師範学校講師（日本絵画史）も兼任した。戸部は西崖の大著『密教発達志』の著述を手伝い、また、西崖の推薦により東京帝国大学の高楠順次郎の私的事業である「聖教調査会」に参加して仏教資料蔵庫の調査を行い、美術史料を得て研究を進め、論文を発表し始めた。かくて将来を期待されていた時期に、先輩の平子鐸嶺と同じく、中途にして燃え尽きてしまったのであった。

戸部の死後、友人の建畠大夢、鈴川信一、森田亀之助、田辺孝次らは十歳を頭に四人の遺児を擁して郷里能登七尾町の実家に暮らす夫人貞子のために校友会月報を通じて遺児教育資金募集を行ない、五二五円を集め、そのうちの二三円余りで戸部隆吉抄録集を製本して二十冊を本校文庫へ、二冊を宗教大学図書館へ、一冊を東大印度哲学教室へ寄付し、残額を夫人に贈った。昭和四年に至り、正木直彦、高楠順次郎、堀口蘇山その他の尽力によって遺稿集『日本仏教美術之研究』が芸苑巡礼社から発行された。これには正木直彦、高楠順次郎、結城素明、平福百穂、建畠大夢、北村西望、望月信亨、蔦谷龍岬、小野玄妙、松田福一郎、鈴川信一、逸見梅栄、海野清、関野聖雲、吉田秋光、田辺孝次、野生司香雪、田中万宗、増田正宗、石田はる子、吉村忠夫、林謙三、鎌倉芳太郎、山口蓬春、大野隆徳、堀口蘇山らの文を集めた「追憶録」が付け加えられており、戸部の業績、人柄を知る上で大変参考になる。

⑤ 皇后行啓

大正十年四月二十七日、本校へ皇后行啓があった。『東京美術学校校友会月報』第二十巻第二号は「行啓記念号」として発行され、当日の模様を詳しく報じているが、ここではその主要部分を転載する。

皇后陛下東京美術學校へ　行啓御次第

一大正十年四月二十七日午後零時三十分御出門
一本校　著御ノ際校長以下職員及參校諸員ハ玄關前ニ生徒ハ門外ニ於テ　奉迎
一校長御先導便殿ニ著御　御休憩
一校長御覽次第書、學校一覽、職員名簿、生徒人員書等捧呈
一拜謁（勅任官以上ハ便殿ニ於テ奏任官其他ハ通御ノ際廊下ニ於テ）
一校長御先導　出御
一左記教室生徒課業成績參考品等御覽

日本畫科	主任　教　授	川合芳三郎
豫備科	八重櫻寫生	助教授　篠田十一郎
一年級	鳥類寫生	助教授　小泉　勝爾